

〔一〕 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

とりあえず、指示に従って、そばに敷いてあった銀色のマットの上に腰を下ろす。

ぶるり。春先とはいえ、もうすつかり夜。吹きっさらしの屋上は、たしかに冷えた。よく見れば嵐士先輩は、制服の上に厚手のパーカーを<sup>(ア)</sup>羽織っている。防寒のことなんか、考えてもみなかった。

私はありがたく毛布にくるまり、銀マットの上に横たわって、空を見上げた。

「……あれ？」

ばちばち瞬きする。

「さつきより星が見える」

ついさつきは、たしかに、何もかもが黒一色で塗り込められたような暗闇だった。

でも今は、こんなにたくさん星が見える。星だけじゃなくて、山の端の薄明かりや、ちかちか光る飛行機のライト……闇の中の小さな光が、はつきり感じ取れるような。

「暗順応」

「なんて？ アンジューンノー？」

訊き返す。嵐士先輩は、「<sup>(イ)</sup>ダメ」つとけばよかった、面倒くさいなあ」という副音声付きで、

「暗順応。目が暗さに慣れるまでには、時間がかかるんだよ。夜、電気を消してすぐは真っ暗で何も見えないけど、しばらくすると、ぼんやり見えるようになるだろう」

「ああ、わかります」

「だから、星を見るときも、なるべく暗くしたほうがいい。減光ライトって言って、ライトに赤いフィルムを貼ってるのは、そのため」

「へえ」

感心しながら赤いペンライトを点けたり消したりしていると、嵐士先輩は望遠鏡を覗き込みながら、続ける。

「新月の日の前後を狙って観測するのも、そのため。月はまぶしすぎる」

「新月……」

そっか。今日、月がないんだ。だからあんなに暗く感じたんだ。

嵐士先輩がまた望遠鏡に集中し始めたので、しばらくの間、私は空を眺めた。

月のない夜空。砂金のように、ちかちか瞬く星々は、でも怖いくらい無言だ。

スマホもない。明かりすらない。

突然世界と切り離されたみたいで、私は<sup>(ウ)</sup>居心地が悪い。

「先輩、なんかしゃべってくださいよ！」

思わず、空に向かってそう叫んだ。

「なんで」

「寂しいから」

「はあ？」

暗くて見えないけど、きっと眉ひそめてんだらうなって感じの声。

私は勢いをつけて起き上がる。

「なんか、寂しくないですか、夜って」

先輩は無視するかどうか迷ったような一瞬の間の後、

「じゃ、昼間は寂しくないわけ？」

なんて、皮肉っぽく返した。

たいして意味もないってわかっているけど、夜の闇は、人をむやみに物思いに誘う。

昼間。そうだな、昼間も……寂しいかも。

なんでだろうね。ずっとつながってるのに。

笑ってるのに、寂しい。楽しいのに、明るいのに、寂しい。

みんなとわちゃわちゃグループチャットしながら、でも本当はどこにも私のことわかってくれる人はいないんだらうなって、そんな寂しさがある。ような。

なんて。いつもはこんなかすかな感情、気づきもしないのに。<sup>①</sup>これも暗順応？

「……あ。思い出した」

そこでいきなり、嵐士先輩がつぶやいた。

「えるも」

闇を揺り動かす、不思議な響き。それが自分の名前だと気づいて、ビクツとする。

「えっと、はい？」

「君、もしかしてふたご座？」

「そうですけど、なんで？」

私は目をちくりさせる。嵐士先輩は言った。

「セントエルモの光。知らない？」

なにそれ？首を傾げる。

「雷雲の影響で、尖ったものの先端で弱いコロナ放電が起きて、青白く光ることがある。かつて船乗りの間では、船乗りの守護聖人である聖エルモの加護のしるしとされた。それがセントエルモの光。セントエルモの火、とも言うけど」

「はあ」

で、それとふたご座に、なんの関係が？そう思っていると、嵐士先輩がつけ加えた。

「ふたご座の神話で有名なカストルとポルックスが、<sup>(エ)</sup>コウカイ中、この光を見たところ、嵐が止んだらしい。だからカストルとポルックスも、船乗りにはあがめられたりする」

「へえ……」

すごいな、この人。さらっとこんな知識を披露できるなんて。

「自分の名前なのに知らなかったのか？」

「いや、さすがに※ニッチでしょその情報は」

残念ながら親せきに船乗りはいないし、私の名前がその「セントエルモの光」由来とは考えにくい。ふたご座生まれなのもたぶん偶然だろう。とは思いつつ。

②「……自分の名前、嫌いだ」。そもそも意味なんか考えたことなかったです」

そういえば小学生のころ、自分の名前の由来を調べるという授業があった。

母さんはそのころから自由人だったので、「んー、なんか、ノリで」という、とてもみんなの前では発表できないようなことをたまった。しょうがないので、私は、赤いふわふわのモンスターを思い浮かべながら、「いつでも明るい笑顔の子になるように。誰から

も愛される子になるように」ってでっちあげたのだ。我ながらたいした嘘つきである。でも。

放電。放電だって。

雷。嵐。青白い光。全然<sup>(オ)</sup>オタやかじゃない。「明るい笑顔」の□じゃん。

知らなかった。そんな意味もあるなんて。

私、えるもって呼ばれるたびに、「笑いなさい」って言われてるようでモヤモヤしてたけど。本当はそんなこと、なかったのかな。無理に明るくふるまう必要、なかったのかな。

「……明るくなくてもよかったんですかね」

「ん？」

「あ、いや、なんでもないです」

わ、心の声が漏れてた。恥ず。って思ったけど、

「暗いほうがいいよ」

嵐士先輩はまたぐっと上体を屈め、望遠鏡を覗きながら言った。

「街明かりの多い場所では、こんなに星は見えない」

③「ああやっぱこの人、星のことしか考えてない。話噛み合ってるじゃないし。でも。」

「久閑野は田舎だけど、そのぶん空が暗い。星を見るには最高だ」

「あ……」

そういうことか。

「暗い」は誉め言葉って。

暗ければ暗いほど、星は見えやすくなる。だから、天文部員にとっては、暗いほうがいいんだ。私にとっては何もない場所だった久閑野の夜空。

でも先輩はそこに、星の光を見出す。

そう思うと、なんかよくわかんないけど、ブルツて身震いがした。

「M51入れるか。りょうけん座……」

何か専門用語をつぶやきながら、望遠鏡を器用に動かす嵐士先輩。  
そのシルエットはまるで、夜空に砲台を向ける戦士のよう。  
精巧な機械を操り、天を調律する技師のよう。

うつかりかっこいいなって思ったのは……だってこの人は、一人で夜と対峙<sup>たいじ</sup>してるから。この世で一番大きな影を前にして、誰ともつながらずに、すつくと立っている。

いつだってそう。私が部屋でスマホを煌々<sup>くわんくわん</sup>と光らせ、明日には忘れるような意味のないやりとりをしている間も、外では星が瞬いて

いる。

私はそのささやかな光に、気づかないままで。

「あああああー!!」

④ 私は思わず、夜空に向かって大声を上げた。

「何」

「いや、なんでもありません。セイシユンの叫びです」

「セイシユンは好きにすればいいけど、観測の邪魔しないで」

「スミマセン」

嵐士先輩はやっぱり冷たい。でも。

あー、私ってほんと、かっこ悪い。

久閑野にはなんにもない、とか言ってます。

なんにもないのは、私じゃん。

本当は欲しい。私だって。やりたいこと。熱中できる何かが。

暗くても、一人でも、凜として立っていられるだけの何かが欲しいよ。

そのとき、びゅうと風が吹いて、嵐士先輩の重い前髪をさらった。

※ニッチ：広く認知されていない。一部の人にのみ興味を抱かれる。  
(天川栄人『セントエルモの光 久閑野高校天文部の、春と夏』より)

問一 — 線部(ア)の漢字をひらがなに、カタカナを漢字に直して答えなさい。

問二 —         に当てはまる語句として最も適切なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 同類   イ 比較   ウ 対極   エ 対面   オ 究極

問三 — 線部①「これも暗順応？」とあるが、「これ」とはどういうことか。四十五字程度で説明しなさい。

問四 — 線部②「……自分の名前、嫌いだし」とあるが、それはなぜか。その理由がわかる一文を本文中から抜き出し、最初の五字を答えなさい。

問五 — 線部③「ああやっぱこの人、星のことしか考えてない」とあるが、「私」がそう感じたのはなぜか。最も適切なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「私」はもつと自分のことを話したいのに、嵐士先輩は星が本当に好きな人しか相手にしないから。

イ 「私」は望遠鏡の扱い方を教えてほしいのに、嵐士先輩は一人気ままに望遠鏡を覗いているから。

ウ 「私」は恥ずかしい様子を見せているのに、嵐士先輩は気にすることなく星座の話をしているから。

エ 「私」は嵐士先輩の星についての知識の量に十分驚いているのに、嵐士先輩はまだ満足していないから。

オ 「私」は自分のふるまい方について言っているのに、嵐士先輩は夜空の暗さの話をしているから。

問六 — 線部④「私は思わず、夜空に向かって大声を上げた」とあるが、それはなぜか。五十字程度で説明しなさい。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

現在の人間たちの協力の最たるものは「職業」です。多くの人は職を持っていて、特定の仕事をすることで生きていけるようになっていきます。私の場合であれば大学教員です。a ので、大学で講義をしたり、b 研究をしているだけで給料をもらって、衣食住を賄うことができます。私が身に着けている衣服も毎日食べている食料も、住んでいる家も、自分で作ったものではありません。作ろうと思っても質の高いものは作ることができません。その代わりに他のもつと技術のある人間が仕事として作ってくれたものを買っています。

現代人には当たり前すぎて普段はあまり意識しないかもしれませんが、これは、大きな協力関係です。皆が自分以外の誰かのために質の高い仕事を「d」することで、全員が安全で快適な生活を送ることができています。

職業という協力関係の重要さは、誰かが仕事を辞めたらどうなるかを考えるとすぐにわかります。A、衣服を作る仕事の人が全員辞めてしまったら、みんな自分の服は自分で作らないといけなくなります。きつと粗末な衣服しか作れないことでしょう。忙しい人は全く作れないかもしれません。着替えを用意しておくのも大変ですし、洗っているうちにぼろになるでしょうから、洗濯もあまりしなくなるでしょう。衣服は汚れ、感染症も広まりやすくなるかもしれません。現代人が安く品質の高い衣服を手に入れることができているのは、作ることに特化した人が専門に作ってくれるおかげです。

そしてそれは、□な関係ではありません。衣服を作る人も食料や住居は別の専門家に作ってもらっています。私たち人間は、現在、社会という大きな協力関係の網の目の中に組み込まれています。

「社会の中に組み込まれる」ということは「社会の菌車になる」ということです。この言葉にはあまりいい印象は、ないかもしれませんが。自分の個性とかアイデンティティがおびやかされていると感じるかもしれません。しかし、①それは誤解だと私は思います。むしろ社会の菌車になることでほとんどの人は個性を発揮して、みんなの役に立てるのだと思います。

たとえば、社会が全く存在しない状況を考えてみましょう。父親、母親、小さい子どもの3人家族だけで無人島で暮らしているような状況です。この場合、生きていくために必要な仕事はすべて3人だけで分担しないとけません。狩りをするのは、生物的に力の強い大人の男性である父親になるでしょう。植物や果物を採集したり、調理したりするのは、狩りに不向きな女性や子どもの仕事になるでしょう。たとえ、狩りなんて荒っぽいことが嫌いな男性や、採集よりも狩りの方が好きな女性だったとしても、餓え<sup>う</sup>ないためには身体的に向いている方をやらざるをえません。狩りに失敗したり、食べ物を見つけることに失敗したりすれば、すぐに命の危機が訪れます。また、この世界では、勉強が得意とか、絵をかくのが得意とか、コミュニケーション能力が高いとか低いなどの個性が役に立つことはありません。なにより必要なのは、獲物をしとめたり、食料を確保する能力です。力や体力が何よりも重要です。強く丈夫で健康な人間だけが生き残る世界です。それ以外の個性には出番はありません。

一方で私たちの社会は違います。力や体力が必要な職業もあれば、勉強や絵を描くことやコミュニケーション能力が必要な職業もあります。どれか1つの能力が優れていれば、十分に活躍の場が見つかります。少なくとも狩猟採集社会よりは、今の社会の方が自分に合った役割(菌車)が見つかる可能性が高いように思います。

こうした他人との協力からなる社会を形成するようになると、②人間という生物が増える単位も変わってきます。人間以前の生き物は自分の力で自分だけを増やしていました。細菌も線虫もカエルも虫もサルも、増えることができるかどうかは自分の能力や運によって決まっていました。優れた能力を持っていれば生殖に成功し、子孫を作ることができますし、そうでなければ血統は途絶えてしまします。ところが協力関係の網の目の中にいる人間は違います。自分が生き残って増えるためには他の人の能力も重要です。また自分の能力もほかの人が生き残って増えることに貢献しています。自分の命が大事なと同じように、他の人の命も大事になっていきます。増える単位が自分の体を超えて広がっているといってもいいかもしれません。

このような大規模な協力関係は人間ならではの特徴です。人間以外の生物が非血縁個体と協力することは、特殊なケースを除いてほとんどありません。なぜ人間のみでこのような特殊な能力が生まれたのかについてはいろいろな説があります。人間の持つ高度な言語能力や認知能力や寿命の長さが大事だったと言われています。また、それらの能力が生まれた背景には、狩猟採集生活の中で協力する必要性があったことや、子どもが成長するまでに時間がかかることから子育てに他の個体の協力が必要だったことなどが指摘されています。

このような性質のどれが直接的原因だったのかはわかりませんが、いずれにせよ、このような他の個体との協力を可能とする人間の性質は、元をたどれば少産少死の戦略によってもたらされたものです。命を大事にして長く生きるようになり、他個体と付き合うことが可能になったために協力することが有利になりました。

しかも、人間には他者を認識する知能や、他者の気持ちを察することのできる共感能力も備わっています。結果として協力関係がどんどん発展していきました。私たち人間は地球上の他のどんな生物よりも協力的な、いわば「やさしい」生物です。このようなやさしさの進化は少産少死の戦略を極めてきた生物にとって必然だったように思えます。

現代に生きる人間はすべて他者と協力することで増えてきた生物です。<sup>③</sup> 協力しやすい性質を持っているのは間違いないですが、同時に協力しなければならぬという規範も（先天的か後天的かによらず）受け継いでいます。したがって私たちは、身近にいる人と協力的な関係を築けていない、B 仲が悪い、あるいは嫌いで協力したくない状況にあると居心地が悪く、悩んでしまうことになり。

しかし、<sup>④</sup> よく考えてみるとこのような悩みは理屈に合わないところがあります。たしかに現代社会は人と人との協力関係によって成り立っていますが、だからと言って、必ずしもすべての人と仲良くなる必要はありません。現代社会の協力関係は洗練されており、個人の好き嫌いにはあまり影響を受けなくなっています。現代社会のまっとうな企業であれば、そのような個人的な好き嫌いで仕事が滞ることは避けるようなくみになっていくと思います。つまり、仲が悪いからといって協力関係が崩れているわけではないのです。学校での同級生との関係性についてはなおさら関係ありません。学校でみんなと仲良くすることを教えられますが、それは社会を維持するための協力を身に着けるためです。大人になって職業についたときに、仕事を円滑に行うために必要な程度に協力的であれば十分なはずで、すべての人間と仲良くなる必要はありません。しかし、私たちは必要なまでに他者との関わりを気にしてしまいます。嫌いな人間、仲の悪い人間が近くにいることにストレスを感じてしまいます。ここには、私たちの考え方と現代社会のしくみとのズレがあるように思います。

（市橋伯一『増えるものたちの進化生物学』より）

問一 〳〵線部を文節に分けた場合の文節数と、単語に分けた場合の単語数をそれぞれ答えなさい。

問二 〳〵線部 a～e の単語の品詞名として適切なものをそれぞれ次のア～コの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 名詞                   イ 動詞                   ウ 形容詞                   エ 形容動詞                   オ 副詞  
カ 連体詞               キ 接統詞               ク 感動詞               ケ 助動詞               コ 助詞

問三 A・B に当てはまる語として適切なものをそれぞれ次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。  
ア ところ               イ たとえば               ウ つまり               エ なぜなら               オ そのため

問四 〳〵 に当てはまる語として最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 一方的               イ 間接的               ウ 具体的               エ 科学的

問五 〳〵線部①「それは誤解だと私は思います」とあるが、筆者がそのように述べるのはなぜか。その理由として最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 強く丈夫で健康な体があれば、どんな社会でも必要とされる人物になることができるから。  
イ 社会の歯車になれば、個性を問わず、すべての人が人々の役に立つことができるから。  
ウ 社会の中にいるからこそ、自分にあつた役割で能力を発揮して活躍する可能性が広がるから。  
エ 狩猟採集の時代とは違って、今は生きていくために必要な仕事は誰かに任せてしまえばいいから。

問六 〳〵線部②「人間という生物が増える単位も変わってきます」とはどういうことか。四十五字以内で説明しなさい。

問七 〳〵線部③「協力しやすい性質」に当てはまらないものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。  
ア 言語を高度にあやつることができる能力               イ 他者の気持ちを察することができる能力  
ウ 他者の存在を認識することができる能力               エ 仲が悪くても協力することができる能力

問八 〳〵線部④「よく考えてみるとこのような悩みは理屈に合わないところがあります」とあるが、筆者がこのように述べるのはなぜか。その理由を四十五字以内で説明しなさい。

〔三〕 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

今は昔、①横川の源信僧都は大和国、葛下の郡の人なり。幼くして比叡の山に上りて学問して、※やむごとなき学生になりければ、※三条の太后の宮の御八講に召されにけり。八講果てて後、賜はりたりける。※捧物の物どもを、I 少し分かちて、大和国にある母のもとに、「かく②なむ後の宮の御八講に参りて賜はりたる。※初めたる物なれば、A まづ見せ奉るなり」とてII やりたれば、母の返り事にはいはいはく、「※おこせB たまへる物どもは喜びて賜はりぬ。かくC やむごとなき学生になりたまへるは、限りなく喜び申す。ただし、D このやうの御八講に参りなどして歩きたまふは、※法師になし聞こえし本意にはあらず。※そこにはめでたく思はるらめども、③ 嬭の心には違ひにたり。嬭の思ひしことは、『女子はあまたあれども、男子はそこ一人なり。それを、元服をもせしめずして、比叡の山に上せければ、学問して※身の才よくありて、※多武峰の聖人のやうに貴くて、※嬭の後世をも救ひたまへ』と思ひしなり。それに、かく※名僧にてはなやかに歩きたまはむは、本意に違ふことなり。『我、年老いぬ。生きたらむほどに聖人にしてE おはせむを心安く※見置きて死なばや』とこそ思ひしか」とIII 書きたり。

〔『今昔物語集』より〕

※やむごとなき学生…立派に仏教の知識を学んだ僧。

※三条の太后の宮の御八講に召されにけり…冷泉天皇の皇后が主催した（高貴な）法華経の講演会に（名誉ある）講師として招かれた。

※捧物…講師を務めた僧侶へのお礼の品。

※初めたる物…初めて頂いた物。

※おこせたまへる物ども…贈った品々。

※法師になし聞こえし本意…（母が源信僧都を）僧侶になるようにして差し上げた本来の意図。

※そこにはめでたく思はるらめども…あなた（源信僧都）は立派なことだと思われるのでしようが、

※身の才よくありて…教養をよく身につけて。

※多武峰の聖人…名声を嫌って世を捨て、多武峰にこもって修行に専念した。「聖人」とは修行に専念している高潔な僧侶のこと。

※嬭の後世をも救ひたまへ…母があの世界で極楽に行けるように助けて下さい。

※名僧…世間で名高い僧。

※見置きて死なばや…見てから死にたい。

問一 線部A～Eを現代仮名遣いに改め、すべてひらがなで答えなさい。

問二 線部I～IIIについて、動作の主体として適切なものを、それぞれ次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。ただし、

同じ記号を何度使ってもよい。

ア 源信僧都 イ 母 ウ 三条の太后の宮 エ 多武峰の聖人

問三 線部①「横川の源信僧都」の行動に関する説明として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 源信僧都はたびたび御八講に招かれていたので、母は以前から気に食わないことだと考えていた。

イ 源信僧都は初めて招かれた御八講のお礼の品なので、母の気に障ると知りながら贈ることを決意した。

ウ 源信僧都は初めて頂いた御八講のお礼の品を少し分けて、大和にいる母にも見せようとして贈った。

エ 源信僧都は初めて頂いた御八講のお礼の品を独り占めしようとしたので、母から叱責する手紙が来た。

問四 線部②「なむ」によって文末の単語の活用形が変化しているが、このような決まりを何と言うのか答えなさい。

問五 線部③「嬭の心には違ひにたり」について後の問いに答えなさい。

(1) 母は源信僧都がどのように振る舞っていることが自分の気持ちと違っていると述べているのか。三十字以内で答えなさい。

(2) 母は源信僧都にどのような僧になってほしいと考えていたのか。本文中から抜き出して漢字二字で答えなさい。

問六 『今昔物語集』は平安時代末期に成立したとされる作品であるが、これと同じく平安時代に成立した作品を、次のア～エの中から

一つ選び、記号で答えなさい。

ア 枕草子 イ 万葉集 ウ 平家物語 エ おくのはそ道